

高

僧も爺で座しぬ枇杷を食す
小学生の時使っていた箸箱に、この句と枇杷

の絵がかかれていたのを覚えていた。おそらく選ぶまでもない、親が店先の適当な箸を求めたのだろう、小さな子どもが喜ぶかどうかなど毛ほども思わずに。食卓に無造作に置かれたそれを見て、「ふん、箸箱新しくしたんだ」と思いはしたものの、どこをどう見ても子ども向けではないことにちよつとがっかりした。ただ、いつまでも気になる箸箱だったので、おかげで今に至るまで忘れずにいる。

食事のたびに句と絵をなぞるように見たのにはわけがある。「爺で」とあるのがどうしてもわからない。高僧、爺、座す、いずれも意味は分かるのだが、「で」で結ばれてみるとさっぱりわからない。崩し字の書体も何だか子どもには突っぱねられているように感じられたし、どういう意味かと聞くことも思いつかず、そのまま何年も使い続けた。

こんなことを半世紀ぶりに思い出さしてくれたのは、夢窓国師の『夢中問答集』である。足利尊氏の弟直義（ただよし）が問い、国師夢窓疎石が答える形で、仏道の要諦を示したものだ。南北朝争乱のさなか、権力のトップに立ち、兄とともに時代を開いた悲劇の武将と政治と文化に多大な影響を与えた高僧の問

答集というだけでも胸躍るものがある。仏教の素養のない者にとつては、注を頼りに少しずつ読み進めていくほかないのだが、当時の世相を彷彿させるやりとりもあつて読み物としてとてもおもしろい。

一人の老いた尼君がいた。清水寺に参詣し、一心に願い事をしていく。傍らにいた者が何を祈っているのかと問うと、

「私は若い頃から枇杷の実が好きですが、あまりに核（さね）が多いものですから、毎年五月にはここに参りして核をなくしてくださいと祈っております。ですがまだ効験がありません。」

夢窓国師は、当然笑い話としてこれを挙げていく。よつぽどのエピソードを気に入っているらしく、別の章でも、前にも言っただけの話、という感じで語っている。最初に話したときに直義が声を上げて笑ったか、ニンマリしたのだろう。二人にとつてツボだったんだろうなあと思うと、老尼君のかわいさといまつて読んでいくこちらまで楽しくなる。

高僧も爺で笑っている。あつ、箸箱のあの句、というわけである。

なお、源頼朝像として伝わる有名な神護寺の肖像画、実は足利直義を描いたという有力な説がある。あの冷徹な目が思いつきり笑ったところを想像した。



専業ババ奮闘記(その2) 16

木幡智恵美

同窓会 (5)

ご飯のスイッチを入れること、魚を焼くこと、頼んでいたことを夫はきつちりややっていく、玄関で同窓生たちを迎えてくれた。

台所のテーブルは六人掛けで椅子が足りない、台所と通しの居間に応接台を入れて座布団を敷き、そこに六人と夫、テーブルには義母と私がついた。

Iに配膳を手伝ってもらい、皆で昼食を摂る。「コリコリしたの、何じゃ」とH。「サザエだよ」と答えると、Hは初めて食べると言いながら、「うまいのお」とお代わりをした。「前に、べべ飯食べさせてくれたよね」とI。すっかり忘れていたけど、Iが何度か目に来た際、一緒に海に行つたのだろう。べべをとつて、べべ飯を馳走したらしい。貝とりや魚釣りの話を夫がし出すと、いつもは主役のHも聞き役に回っている。私の同窓生の中に、夫はすっかり溶け込んでいた。義母は、そんなやり取りに目を細めながら、箸を動かしている。もうすぐ百歳だというと、「お元気ですね」「若く見えますよ」の声が返ってきた。

サザエご飯、ブリの照り焼き、サラダ、シジミ汁というメニューの最後はデザート。手作りのババロアに、友人からいただいたブルーベリーをジャムにしてかけたものだ。男連中も、残さず食べてくれた。

おまけに、ほんの一握りのルバーブジャムを回した。「微妙な味」という反応で、口直しに甘いお菓子を食べてもらう羽目になったが、どうしても皆に味わせたかった。

このルバーブ、五年越しでようやくできたものなのだ。夏を越せず一度は諦めたものの、数年後、再度種を蒔き、夏は日よけをして何とか暑さを乗り切った。ところが冬には消滅。またダメかと落胆していたところ、春に新芽が出て飛び上がった。そんな喜びと落胆を何度も繰り返しながら、五年持ちこたえてくれた。半世紀近く前の四年間、共に汗し、涙し、喜びを分かち合った友に、私の大事なものを味わって欲しかったのだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。新型コロナウイルス対策の専門家会議が廃止され、特措法によって閣僚会議の下に新設された分科会に仕事を引き継がれた。「科学を政治化するのか」(神戸大学医学研究科感染症内科教授・岩田健太郎)といった批判がある。

年金生活者 経済活動を再開するには、感染防止一辺倒から転換しなければならぬから、そのために専門家をコントロールする必要があると政府は考えたのだろう。それだけ専門家会議の発言力は大きかった。

「あたかも専門家会議が政策を決定しているような印象を与えていたのではないか」。専門家会議自身がそう記者会見で振り返ったように、一定の期間、とりわけ感染の拡大局面では、この会議が事実上おもな政策を決定していたと言っている。医療界の持つ権力は政府を左右し、国民の行動を拘束するほど強いものであることをコロナ危機はあらわにした。

減の中には医療技術の発達も含まれる。

新型コロナウイルスはこの生権力の姿を照らし出した。コロナ感染でひとりも死なせてはいけない。重症者は人工呼吸器やエクモで延命させなければならぬ。そのため設備と人員には限りがあるから、重症者を増やさないようにしないとけない。それには感染者の増加を抑えなければならぬ。これが緊急事態宣言という生権力の発動を正当化した理屈にほかならない。

30代 生権力はなぜ人に死なれることを恐れるんだ。

年金 人の死が自らの存在を危うくすると考えているからだ。

人間は言葉を持ったときから、死を生の否定としてとらえるようになってきた。否定は言葉に固有の機能であり、言葉以前に否定は存在しなかった。死を生と連続したものとするとならぬ方も、新たな生の始まりと考えると、必ず死の前の生の否定を含んでいる。

資本主義の高度化は国家から個人、企業への権力の分散を促した。ここでいう企業には医療界が含まれる。その核心をなすのが製薬・医療機器会社だ。国家から分散した権力を手にした医療界はコロナ対策で政府を動かし、国民の日常を変えた。

ただ、そのせいで多くの患者が受診を自粛し、医療機関の経営が危うくなっている。医療界は個人に対して必ずしも優位に立っているとは言えない。それは企業が消費者に対して優位に立っているとは言えない現状と同質のものだ。国家から個人、企業に権力が分散したが、消費者としての個人と企業を比べると、個人のほうが分散した権力をより多く手にしていると言えることができる。

30代 先週、ジイさんは、医療界と行政は、フリーターのいう生権力として、個人の行動を制限し、感染者の数をコントロールしようとした、と言ったな。

年金 人を何があんでも生かしたがる

生の否定は個別性の否定だ。生とはそのつど特定の時間と特定の空間を占めることであり、個別的なことの連続にほかならない。その否定、すなわち死は普遍性への移行を意味する。

普遍性は権力を権力たらしめているものでもある。権力は普遍的であるがゆえに、個別的な存在である人間を包括し、それによって個人の上位に立ち、個人を制御する。

のが生権力だ。患者が苦しがつても生きさせる延命治療が行なわれるのは、そこに生権力が働いているからだ。

萬田緑平という在宅緩和ケア医が次のようにツイートしている。「ピンピンコロリは超難関。まず、それを許す医師はいない。救うのが仕事だから。それを許す家族もいない。死んで欲しくないから」。生権力は私たちの日常において作動している。

先週も言ったように、近代以前の権力は逆らう者を殺す権力だった。近代以降は人を生かして従わせる生権力に替わった。それは個人個人を軍隊や学校や工場で訓練して規律に従わせる一方、住民全体を人口動態や健康状態の統計・調査を通じてコントロールする。

生権力が誕生したのは、大量生産、大量消費に支えられる資本主義が大量の人口を必要としているからだ。個人は労働力として、消費力として生かしておかなければならない。

資本主義の高度化で富の稀少性の縮

その個人が死んで、生の個別性を離脱し、普遍性を獲得すると、権力の普遍性と競合する可能性が出てくる。生権力が人を生きさせようとするのは、資本主義がそれを求めているという理由からだけではない。人を死なせることがおのれの存在を脅かす恐れがあるからだ。

30代 それほど死を嫌う生権力がなぜ戦争を重ねてきたんだ。

年金 生権力は近代以前の権力よりもはるかに多くの人命を戦争で失わせたりした。それももとをただせば自国民を生きさせるためだった。パイが他国民と分かち合えるほど大きくない以上、自国民を生かすには力づくで奪う必要がある。

だが、パイが大きくなれば、その必要はなくなる。資本主義の高度化が加速する富の稀少性の縮減がパイを膨らませ、世界の戦争の本流を熱い戦争、リアルな戦争から冷たい戦争、バーチャルな戦争に替えた。生権力はその名により近いものになった。

ニュース日記 748
中村 礼治

死ぬことを許さない 権力